

『三四郎』美禰子との別れ

Junko Higasa 2014.5.31

ある寒い日、会堂^{チャーチ}の前で三四郎は美禰子に借入金
を返し、それを黙って受け取った美禰子は、袂から
白いハンカチを出した。それには三四郎が意味も知
らずに好加減^{いいかげん}に選んだヘリオトロープ(恋草・神草)
の香りがしみ込んでいた。『結婚なさるそうですね』
『ご存じなの』その目は『三四郎を遠くに置いて、
却って遠くにいるのを気遣い過ぎた眼付である。そ
の癖眉^{はつきり}だけは明確落ちついている』彼女の『われは
我が愆^{とが}を知る。我が罪は常に我が前にあり』という
聞き取れないほど小さな声を、三四郎は明らかに聞
き取った。『三四郎と美禰子は斯様^{かよう}にして分れた』

出会ってから幾度となく、三四郎に恋の行動を促
した美禰子。持参金である自分の預金を三四郎に預
けて、返金されるのをかわした美禰子。その努力も
空しく、美禰子は他の男と結婚する。原口のアトリ
エに、二人が出会った時の服装とポーズで画のモデ
ルを務める美禰子を訪ねて『ただ、あなたに会いた
いから行ったのです』とようやく告白した三四郎。
女は目を上げずに、ため息を漏らした。すでにその
時、結婚が決まっていたのだった。

三四郎が結婚披露宴の招待状を机の上に見たのは、
帰京の当日であった。時期は既に過ぎていた。それ
はまさに、池の周りをぐるぐる回りながらすれ違う
運命を描いた、羊雲の無言のメッセージであった。